

要田圭治 著

『ヴィクトリア朝の生権力と都市』



書評というこれまた情報提供の一形態に自らも従事していることを承知で言うのだが、日本のヴィクトリア朝の文学研究者も、インターネットの加速的普及あたりが契機であろうか、情報過多のなか自己喪失の危機に常に晒されるようになった。そうしたなか、著者はノイズとは無縁の自己貫徹を実現した。それを可能としたのは上下左右に個性的なディケンズ学者のいる広島で、試行錯誤せざるをえなかった著者の環境の幸福と、フロイト、ベンヤミン、フーコー、バフチン、そしてアタリなど、著者青年時代から日本に紹介された批評群との静謐にして孤高の対話だった。

著者は自然と、ロンドン、ベスナル・グリーンに足向け、その図書館の膨大な資料の前に立ち尽くす。そこで「個人」、「生権力」、「労働者住宅」、「音」、「都市」と「都市の死」といったキーワードの内実と対峙し、苦悩を深める。そう、ディケ

ンズから出発した多くの研究者が抱えてきたのは、『荒涼館』を書くディケンズの差し出すニーモアやジョーやエスタやジャーディスらの苦悩、つまりセンチメンタリズムをもって受け止めることのできる苦悩の内在化という課題ではなかった。それに加え、ひとたび彼らの背景を探るや立ち現れる、エンゲルスの言う「個人の誕生」(本書 13 頁、以下数字のみ)、フーコーの言う人を死に追いやる権力ではなく「人に生を与える権力」(199)、ありていに言えば生産確保のため労働者の生に配慮し、これを生かすことで自らを更新する権力の探求に伴う課題もあった。

前者はある種の鑑賞力で足りる。結果、ディケンズの読みをその桁外れのユーモア理解あたりにとどめ、ディケンズはラディカルにあらずとする、もしや日本に特徴的かもしれぬ微温的安住が成立した。後者は著者の姿勢に顕著なように、ディケンズの作品の読みという土台の上に、次々と複数の思想を積み上げていくわけであるから、両者を統合する主体としての著者の抱える新旧論争的葛藤を、これもまたひとつの苦悩と表現しても大げさな形容とはなるまい。「生権力は、むしろ死をあきらかにする」(104)、「構造が生む居住形態が心のかたちまで作る。この点で、労働者のための住宅建設は、健康を経由して、統治・警察的意図と結びついた」(144)といった洞察、そしてフーコーの主張を「性についての言説を増産し、それを配分し、調整するとき、時代の権力は生き生きと活動するのである。人は性について大いに語りながら、それによって権力の作動を助けている」(157)とまとめあげ、これをヴィクトリア朝の言説解明に生かすといった手法は結局この葛藤に起因する。そしてその先で、森鷗外を引きながら「ヨーロッパの都市観察

をした経験から、やはり、貧しい人々が、もとの場所に建てられた高家賃の住宅に住むことができず、あらたに低賃金の住居を求めた結果、あらたなスラムを生じた」(161)と言い、現代日本と明治・大正とのパラレルを暗示する。どの洞察も複数の文脈を喚起しつつ進行するところに、先の思考環境の成果が出る。著者の姿勢を見るにつけ、学問とは孤独だ、という殺し文句を思い出す。その著者が近代をどう見ているかという点で、「名付けのときに、なにかが剝がれ落ちる。その結果、『近代』はどこかに危険な因子を隠し持つことになった。あるいは、その因子との戯れに似た対峙こそが、近代を特徴づける営為のうち多くのものにおいて緊張を生み出し、そのことがその営為のふくらみにつながっているかもしれないのだ」(191)という記述を評者は今後何度でも引用してみたい。

見えないものをどう見えるようにするかが小説であるとする、本書の著者は見えない思想を見えるようにした。翻訳書ではなく、著書のかたちでこの咀嚼のレベルに達したものを読める同時代のわれわれは幸福だ。(音羽書房鶴見書店、2009年4月、四六判 292 頁、2,800 円)

—— 榎 正行 (中京大学教授)